

ピグーにおける福祉国家理念の可能性（下）

山崎 聡

（高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門）

The Possibilities of Pigou's Welfare State Idea (the latter part)

Satoshi Yamazaki

*Kochi University Research and Education Faculty Humanities and Social Science Cluster
Education Unit*

Abstract: The embodiment of Pigou's welfare economics is *The Economics of Welfare*. Its essence is summarized in three propositions (production, distribution, and stability). Since the criterion that forms the basis of these approaches was understood as utilitarian (i.e., the increase or decrease of the social aggregation of economic welfare (utility)), his theory has been criticized by several influential scholars.

Nevertheless, according to Pigou (1951), welfare economics aims at inquiring into the principal effects which are likely to increase the economic welfare of the world or of any particular country. No one would agree or think that the state should ruthlessly pursue economic welfare alone without regard to other values, such as freedom, family amenities, various spiritual needs, etc. Considering his claim, it is not intended from the beginning that anything that does not fit the yardstick of utility (economic welfare) should be disregarded.

It is undeniable, however, that the significance of Pigou's distinction between economic welfare and non-economic welfare and his care to harmonization of the two have been underestimated. As clearly asserted, Pigou never places an exclusive emphasis on the consequent economic welfare (utility) at the cost of other values. He only advocates that, as long as utility-promoting actions or policies do not undermine (or otherwise hopefully indirectly augment) other values (including perhaps non-welfarist values), it is appropriate to pursue economic welfare. Hence, it would be unreasonable to accuse the limitation of economic welfare itself and the narrowness of its value.

With the above the backdrop of this article, we attempt to inquire into those various elements in Pigou that can theoretically be counted and refined as welfare state ideas, and also examine his welfare theory in the light of modern well-being theory.

キーワード：幸福，福祉，厚生経済学

Keywords: Happiness, Well-being, Welfare economics

6. 現代福祉（幸福）論に照らした再検証※

以上（上編）は、ピグーにおける福祉理念に関する主に（経済および倫理）学史的な考察、再構成であった。ここからは、基本に立ち返って、領域を超越した目的に位置付けられる福祉（幸福）論そのものを簡潔にサーベイした上で、これまで検討したピグーの福祉理念の位置付けおよび再評価を試みることにしよう。

現代の（哲学および倫理学における）福祉論とは、平たくいえば、「幸福とは何か？」である（英語だと、well-beingあるいはwelfare, ないしutility accountと題される）。恐らく、かのロールズの『正義論』（1971）による功利主義哲学（福祉論込み）の糾弾が一大モーメントとなったことは間違いないだろう。その後、デレク・パーフィットがその主著『理由と人格』（1986）において、福祉論の三大分類：快楽説、欲求説、客観（リスト）説（Parfit 1986, 493-502）を提示することで、現代の議論の原型を規定したと思われる¹⁾。

森村（2018, 215）にある「三国志」（＝上掲の三大説）の学史的スケッチによれば、まず、快楽説：古代ギリシア時代より賛否検討～19世紀、功利主義の興隆により主流派となる。次いで、欲求説：その後並行する形で、特に経済学の文脈において、効用＝欲求（選好）が新興勢力となる。さらにその後、客観説が浮上：20世紀の終わり頃、上記二説を批判する形で一大勢力になった。そして、現在においても、（派生も含め）三つ巴の論争は続いているとされている。

近年、福祉ないし幸福の議論が学問的に盛んになったことに呼応したのかどうか定かではないが、巷の一般大衆向けの書物（ビジネス書やハウツー本など）でも幸福論が賑わっているように感じられる。もちろん、それはそれで誠に結構なことではあるのだが、（私見ながら）一点注意すべきことがあるように思われる。そこで「幸福とは何か？」という議論がなされる場合、多くは（例えば）「没頭・やりがい」「良い人間関係」「自己肯定感、自尊」（+地位、名誉、財）が揃った時、人は幸福になれる、というような論調²⁾である。だが、ここで注意すべきことは、そうした諸要素＝幸福なのか、それとも、幸福を実現するための諸条件なのかを峻別することである（定義と条件の同一視の誤謬。つまり、幸福とは何かという問いと、どうすれば幸福になれるかという問いとが往々にして混同されているということ）³⁾。

既に、先行研究群において、数多考察されているが、ここでも上掲三大福祉説および幾つかの派生について簡単に押さえておこう⁴⁾。

快楽説：やや余談だが、一瞥すると、「快楽」ほど専門用語－日常用語間でギャップがあるタームも存しないのではないかと、思われる。日常会話においては、「あの人は快楽主義者だ」とか、「私は快楽を欲する」というと、どこか不真面目で、退廃的なニュアンスを伴いがちであるが、もちろん、哲学や倫理学ではそうした嫌いは皆無である。代表的なところでいうと、かのJ.S.ミルは、幸福≡快楽とは、唯一にして絶対的に望ましい至高の価値であると唱えていた（Mill 1863, 210）。話を戻すとして、快楽説とは、幸福は快い心的状態 pleasurable mental statesのみである（不幸は反対の苦痛等）、という立場をいう。より広汎には、Mental state accountsとも称される（Griffin 1986, Ch.1 参照）。かのベンサム（Bentham 1876[1789], 33）曰く、人は二人の主人――快楽と苦痛とに使える存在であると。なるほど、我々の日常的感觉（楽しい、嬉しい、気持ち良い、美味しい等々）とも非常に親和的であることは否定し得ない。ちなみに付言すると、近年、医学の専門集団間を超え、セロトニンやドーパミンといった脳内神経伝達物質の話題が人口に膾炙するようになったが、恐らく、快楽説とかなり密接な関係を持つことになると考えられる。

そのような我々の感覚に近い快楽説ではあるが、難点も幾つか存在する。まず、快楽説は、基本的に、あらゆる幸福の源泉が快楽（心的状態）のみに還元されるという一元論 monism（Anderson

1993, Ch.6 参照) の立場⁵⁾ を取るが、これは妥当であろうか。確かに快い感覚ないし感情が幸福に資することは否定されずとも、それらのみが幸福（の全て）であるか、と問われれば、肯うことは困難であろう。また、ミル（Mill 1863, 221）が提起したように、快楽には質の相違（高級から低級）があるというのが一般的な信念であるが、質の高低を快楽という心的状態がどう区別できるのか、もし特定の種類の快楽を高級と規定するのであれば、それは快楽とは別の価値基準（例えば、知性とか道徳性とか）を外挿しているのではないかという疑義（快楽一元論の否定）が生じることもなる。さらには有名どころだと、ロバート・ノージックによる論難「経験機械 experience machine」（Nozick 1974, 42）も待ち構えている。これは現代でいえば、ヴァーチャル・リアリティ（VR）に相当するもので、要は、実生活や実体験ではなく、人工的な装置で脳に刺激を与えること、あるいは疑似的な体験によって、使用者を幸福状態（同等の脳内物質を分泌させる）に至らしめるというものである。快楽主義者は、これを快楽説に基づいて合理的に批評できるのであろうか。

欲求（選好）充足説：この説によれば、幸福とは、欲求が満たされること（状態）⁶⁾ となる。これも、快楽説同様、我々の日常経験とかなりマッチしている。望んだこと、欲したことが実現することが幸福だということである。何を望むかは当人の主観であることから、（快楽説同様）「主観説」に位置付けられている（Sumner 1996, Ch.2 参照）。素朴な（無条件的）欲求説を始め幾つかのヴァリエーションがある。

先に見たように、あらゆる幸福が快楽（心的状態）に還元される（幸福は快楽のみ）と説くことに付き、快楽説は狹隘に過ぎないかと批判される向きがあった。これに対して、欲求はあらゆるものを対象とし得ることから、そうした論難は当たらない。そして、ノージックの「経験機械」および VR に対しては、率直に「そうしたあり方は望まない」として合理的に拒否できる。また、快楽の質の相違に煩う必要も存しない。より高級（尺度不明瞭）な快楽がより幸福である云々ではなく、「より強く望むこと」のほうが「より幸福」だと説明すれば事足りるからである⁷⁾。

しかしながら、快楽の質の相違問題はクリアされるかに見えるが、実は欲求説も似たような問題を孕んでいるのである。例えば、たとえ「所期の目的が達成された」「望みが叶った」としても、そこに嘘偽りの情報が介在していたとしたらどうだろうか。あるいは、偏った一部の知見（バイアス）に基づいて選好を満たした場合はどうだろうか。はたまた、限りなく十全な情報を備えていながらも、環境的な要因等で自律的に自己の選好を形成できない場合はどうか。そうした欲求を満たすことが本当に幸福といえるのか⁸⁾。快楽における質の相違とは異なるものの、欲求や選好においては、質の相違云々よりもむしろ、それらが形成される先行条件に関して不服が生じるといえよう。つまり、快楽については内的意識が、欲求については外的条件（環境）がそれぞれ福祉としての妥当性という観点から問い質されることになるのである。例として著名なところでいうと、「適応的選好形成 adaptive preference formation」（Elster 1982; 1983）が挙げられる。これは寓話の「酸っぱい葡萄」に擬えて語られることも多く、エルスターの意図が主に功利主義的福祉観＝選好充足説を論難することにあることから、欲求説に対するカウンターとなり得る。不遇な環境・条件の下で通常の欲求を抱く、ないしは高望みすると、逆にそれらが満たされることなく終わることで失望を味わう公算が高くなる。欲求が満たされないことは当人にとっては少なからず苦痛であることは明白であろう。であれば、いっそのこと、そうした環境下では、初めから多くを望まない、あるいは些細なことで満足できるように自らの欲求を抑制（適応）してしまったほうが失望を味わわなくて済むことに繋がる。現状、実現不可能な選択肢に対する欲求を何らかの理由を付けて失くしてしまうことで失望を回避するというもの（執着が苦しみの元となることから、それを手放せば幸福になれるという考え方にも通じる）。具体例としては、家父長制、奴隸制、専制政治体制下にあつて抑圧された人々（の

適応的選好) がしばしば言及される。そうした適応的欲求の充足が幸福と呼べるか否かが問われることになる⁹⁾。

アマルティア・センがいみじくも強調しているように、不正義と長期的抑圧に曝された人々は、彼らの厳しい現実に適応する他はなく、彼らの悲惨、苦痛、そして憤怒は、効用のものさしに十分に映し出されることはない…。さらに、そもそも効用は単なる主観的な満足 of 立証にとどまり、客観的に個人の境遇を捉える指標としての資格を欠いている。したがって、効用に分析視点を特化することは、人の福祉を捉える上で不十分であるばかりでなく、主観主義的誤謬を回避し得ないという欠陥を持っている (Suzumura 1999, 121. 傍点引用者)。

客観説： 快樂説も欲求説もそれぞれ難点があったが、共通して指摘されることは、主観主義的誤謬の側面である。快樂も欲求も専ら本人の主観を反映するものであり、客観的な境遇を捉えることに失敗していると。そこで第三の客観 (リスト) 説の登壇となる。客観説によれば、ある事物は、人々の主観的な欲求や心的状態に関係なく、善し悪しが決まっている。また同説は、通常、複数の要素から構成される (アイテムのリスト)。ただし、主観的な厚生、快樂、欲求を含まない¹⁰⁾ ことから、非厚生主義的 **non-welfarist** (かつ客観的) という属性を持つ。

客観説の規準をもってすれば、快樂説における低級な快樂、経験機械による快樂を、幸福の観点から不適切と断じる一方で、反倫理的な欲求、適応した欲求等を退けることもできる。また、同説の一形態として、ベーシック・ニーズ論を挙げることができる。典型的には、一定水準の教育、健康、衛生等の保障である。こうしたものについては、本人の意思とは無関係に、その者の幸福にとって不可欠であるという根拠で (一定の限度内で) 強制されること (⇒パターナリズム) は今日では珍しくなく、このような事実は福祉理念の少なくとも一部として客観説が支持され得ることの証左とも解される。

とはいえ、ここまでの流れから何となく予想されるように、二大 (主観) 説の快樂説と欲求説における深刻な瑕疵を克服しているかに見える客観説ではあるが、やはり、以下のような疑念が寄せられる。

「効用は単なる主観的な満足 of 立証にとどまる…」と批判し、別のアプローチ、例えば非厚生主義的なそれを用いるとしよう。そのアプローチによって、客観的に「個人の境遇を捉える」ことが仮にできたとしても、最終的、総合的にその個人が人生において〔主観的に〕不満足または不幸であると感じたとするならば、そのアプローチに意義はあるといえるだろうか。その妥当性は如何にして証明され得るのか (山崎 2011, 90)。

多くの人々が問題視する多元主義のある特徴が存する。善なるものの如何なるリストを我々が考案しようとも、他のものではなく、これらのものが何故にリストにあるのか。この問いについて、多元主義は原理的に回答できない。ただリストが存在するだけである。それで話はおしまいだ。…我々は、あるものが我々にとって善であり、他のものがそうでないことに関する説明を求めている。多元主義論者はそうした説明を与えてはくれないように思われる (Bradley 2015, 67)。

その項目〔リスト〕が何の喜びも伴わなかったり、本人がそれを欲していなかったりしたら、それは幸福に資すると考えられるだろうか？つまり、それらが本人にとって価値を持つのは、

快樂をもたらすとか欲求の対象であるという理由によるのではないか？もしそうならば、それらの価値は快樂説か欲求実現説によって説明される（森村 2018, 145）。

以上、メジャーな三つの幸福論をスケッチしてきたが、どれにも一長一短があり、何れか単独で一人勝ちとはなり得なかった。そこで思い付くこととしては、競合する諸説それぞれの良いところを兼ね備えることであろう（Parfit 1984, 501）。これは、混合型の幸福（福祉）論ということになる。果たして、混合タイプは、改良版となり得るだろうか？

混合型の議論の前に、若干用語の整理を行っておきたい。実は、直前で触れたように、このタイプについてパーフィットは言及してはいるものの、あくまでヒントないし可能性を示唆するに留まっており、本格的な考察を施していたわけではない。また森村（2018, 228）の解説によれば、論考（文献）自体が未だ多いとはいえないようである（実際、寡聞ではあるが「ハイブリッド hybrid」というタームを目にしたのは、Sumner（1996, 54, 163-4）くらいである）。

ところで、森村（2018, 230）は、混合型を以下のように分類している。

∧ ハイブリッド説（ $A \wedge B$ ）

折衷説

∨ 多元主義（ $A \vee B$ ）

森村の分類法は、混合型を「折衷説」と定義し、例えば単体（原子）の幸福論 A , B 説があるとしたら、 \wedge で結んだものを「ハイブリッド説」、 \vee を「多元主義」と呼んでいる（森村 2018, 155）¹¹⁾。もちろん、この領域では議論の作法自体が確立していないので、呼称は各論者の裁量で差し支えないと思われることから、この分類法そのものに異議はない。とはいえ、私自身のこれまでの考究を踏まえると、この分類法だと、若干不都合があるので、（もちろん、森村の議論から裨益を受けつつも）以下のように改変させてもらう。

∧ ハイブリッド論理積型（ $A \wedge B$ ）

ハイブリッド説

∨ ハイブリッド論理和型（ $A \vee B$ ）

端的には、混合や折衷自体がハイブリッドを含意すると考えられることから、ヘッド（大分類）もそれに統一したほうが理解しやすいであろう。そして、小分類についても、「ハイブリッド—多元主義」というような一見して別もののような印象を与えるよりも、結合の仕方で区分表記したほうがこれまた理解しやすいと思われたことによる。

さて、用法に関する予備的な話が済んだところで、森村（2018, Ch.4）を参考に、それぞれの型について検証していこう。

まず、ハイブリッド論理積型であるが、例えば、快樂説（ H ）と欲求説（ D ）を原子とすれば、 $H \wedge D$ となる。これは、快樂を伴う欲求充足を意味し、何れか片方だけでは駄目で、両方が同時に充足されなくては幸福とはいえないということを示している¹²⁾。具体的にいうと、先の「経験機械」などについては、快をもたらすが欲求の対象とならないため、幸福ではないと拒否されるという判断となる。あるいは、主客をミックスした $H \wedge I$ （ I は知性的営為）であれば、主観的な低俗な快樂は幸福ではないと否定されることになろう。と、このように単独の説におけるそれぞれの難点を克服しているかに見えるものの、森村はこの型は改良とはいえないと評する。例えば、経験機械に繋

がれることは本当に微塵も幸福に寄与しないのであろうか。そうした人生の中の快に何の価値も存しないと断言することはできないという (2018, 158-62)。または、後者の $H \wedge I$ でいうと、知性レベルが劣った活動で得られる快楽が幸福とは無縁であるといい切ることもできないように思われる。例えば、良い年をした大人であっても、時に (童心に帰って) 幼少期の他愛無い遊び (〇〇ごっこ等) に興じることがあっても良いのではないか。このように考えると、当初の装いとは裏腹に、論理積型のハイブリッド説は、必ずしも改良とはいいい切れないことになる¹³⁾。

次に、ハイブリッド論理和型について見ていこう。上の例に倣えば、 $H \vee D$ となる。つまり、幸福となるには、快楽、欲求充足何れかの翼に掠っていれば十分ということである (もちろん、両方でも可)。この型であれば、先の論理積型で指摘された批判を回避できる。つまり、経験機械による快も幸福として受容され得るのである。また、私が上で例示した知性的営為とのハイブリッド、 $H \vee I$ でいえば、高度に知的な活動でも、頭を空っぽにして野山を叫んで駆け回る遊びも、共に幸福だと見なして差し支えないことになる。

さて、そうなると、こちらの型はどう評価されるか。森村 (2018, 165-6) の見解では、(ピュアな原子説支持者から) 妥協の産物だという誹りを受ける可能性はあるものの、より包括的で説得力のある幸福論を提示できるという点で、原子単体の各説と比較して改善が見受けられるという。ただし、幾ら多元主義 (本稿のハイブリッド論理和型) を取るにしても、幸福と思しき要素を片端から含めて良いことにはならない。特に、手段の要素をカウントすることは失当である。森村 (2018) では、多元主義 (論理和型) の例として、快 \vee 欲求、快 \vee 道徳が挙げられていた。(当然) これに加えて、別のパターン、快 \vee 必要というように、主観説 \vee 客観説という多元主義も考えられよう。しかし、論理積型のハイブリッドにおける主観説 \wedge 客観説とは異なり、論理和型だと、それこそ延いては「何でもあり anything goes」となってしまう、かなりグロテスクな様相を呈することになるだろう。もはやそれは (森村のいい回しを借りれば) 理論 theory や説 doctrine ではなく、単なる見解 view 以下に退歩するものかもしれない。よって、論理和タイプのハイブリッドで主観説と客観説とを総合することには学問的な慎重さが求められる。

しかしながら、本稿 3 節で提示したピグー流タイプのハイブリッド説は、そうした難点のある程度回避できると考えられる。以下、これまで主観説や客観説に向けられてきたそれぞれの論難および前掲のハイブリッド二型の問題にピグーモデルがどう対処できるかについて考察していこう。

本稿のピグーの福祉理念解釈によるハイブリッドモデルは、「二元 (主客) 三層構造」というべきもので、前掲 (第 3 節) の表 (Table 4.1) が示すように、ステージ 1 から 3 へ至るには (教育、能力開発に当たって) 幾ばくか時間的な経過を要することが含意されている。骨子としてまず、間に (ステージ 2) 必要充足の観点から、一定の教育、衛生、環境整備などが挟まれていること、これは本人の好む好まざるとを問わず客観的な見地から (ある程度の強制性を伴って) 施される福祉となっている (最たる例は義務教育)。そして、「二元」として、ステージ 1 (主観) \Rightarrow 2 (客観) \Rightarrow 3 (主観) と推移することが想定されている。

これらは、現代の一般的な一個人の成長過程とアナログカルであるといえよう。つまり、個人は幼少期においてありのままの願望を満たそうと無邪気に振舞うことが幸福であるが、学童期になれば義務教育などにより規律に服することが強いられる。しかしながら、それにも限度があり、成人となれば (基本的には) 当人の自由意志の下で生活することが幸福であると見なされる (もちろん、他者に害を加えないといった基本的な法規の範囲内であるが)。逆にいうと、現代において一個人がこうしたプロセスを経ることが一般的となっていることは、それが当人の幸福実現に最も迫ったモデルであることを示唆しているのではあるまいか。卑近なところだと、子の幸福を願う親、教師などはこうしたモデルに共感するところが大きいと思われる。

まず、快樂説における幸福＝（究極的には）快樂（のみ）であるという狹隘さに関していえば、元々（拙稿で述べたように）ピグーの厚生は、（ベンサムタイプの）伝統的快樂主義（幸福＝快樂一元論）ではなく、多元的な要因から成る複合体となっている（山崎・高見 2018, 112, 114）。よって、そうした「貧小」という誹りは免れるといえよう。

次に、経験機械については、ピグーの必要充足論にあるように、一旦は本人の主観的な欲求充足が客観的な福利の見地から制限され得ることからして、仮に実体験同様の快樂が体験できようとも、そうした状態は本人の利益にならないとして、拒否されると考えられる（もっといえば、自主的に拒否できる嗜好となるような方向付けが教育他でなされる）。

また、エルスターによる「適応的選好形成」やセン、鈴木らによる「主観主義的誤謬」についても、第2ステージの（客観的な）必要充足の処方（教育、衛生、環境整備）によって、とりあえずは一掃できよう。

とはいえ、第3ステージが示しているように、このモデルは最終的には主観説に立ち帰る。要は、ありのままの無制限な欲求や享受能力に、客観的見地から必要な鍛錬なり研鑽なりを施し、また衛生環境改善を通じて、リファインされた嗜好（refined subjectivism とでもいおうか）へと至らしめるといことである。これが含意するのは以下となる。まず、最終的には主観説が基調となることから、上述したハイブリッド論理和型のように、主観的であれ客観的であれ、好ましく見える要素を片端から取り入れようとする無節操さとは離れているといえる。次いで、上で一個人の成長に擬えたように、一定の処方を施した後は、当人の自由（主観）に任せることをもって福祉と見なすことから、もし本人がどうしても望むのであれば、経験機械（VR）や取るに足らない選好、または一般的には低俗だとされる類の快樂なども幸福だと位置付けられることとなる。このことは一見してネガティブであるかに思われるが、「何だかんだいいながらも、最終的には、本人の好きなようにさせることが一番の幸福だ」と一般的には判断されるシーンも多いことから、逆にポジティブに捉えることも可能であろう。

加えて、上述のピグーによる「クラシックコンサート」と「酒宴」の例から分かるように、幸福に関していわゆるエリート主義のようなトーンはあまり感じられない。しばしば引き合いに出されるミル（Mill 1863, 221）による幸福の質の相違説によれば、質の高い快樂と低い快樂両方を経験した者は、決して低い方を選好することはないとされ、教育等によって、個人は自然と低俗な快樂（満足した豚）を避けるようになるという。このことから、裏を返せば、レベルの低い者は低俗な快を求めるというエリート主義的要素が垣間見える。一方、ピグーのほうは、クラシックコンサート、酒宴双方に通じながらも、あくまで後者を選好するのであれば、それも善（厚生）として認めようという論調である。

最後に、測定の問題について簡単に触れておこう。福祉論として、例えば、快樂説あるいは欲求説といった原子単体の理論であれば、その価値の大小を測ることにはそれほど大きな問題は存しないかもしれない（もちろん、快樂の量をどう測るかは依然大きな課題ではあるが、あくまで相対的に容易というレベル）。ところが、ハイブリッド論理和型の多元的、複合的な立場を取る福祉論においては、計測の問題が執拗に付いて回る。この点に係り、森村は「多元主義への不満」として以下のように述べている（2018, 174-5）。「全体論的多元主義はわれわれの多くが持つ幸福観と調和する点があるようです。しかしそれに対しては有力な批判もあります」として、「複数の善の間のバランス・多様性・適切な関係…を考慮に入れた場合、諸要素の価値の単なる総計ではない、有機的全体としての幸福の価値をどのように判断するかはとても難しい問題」だという。そして、これに関して明快な解答を与えることができる多元主義は存しないと。構成要素の原子説間で有機的な態様ではなく、単純な加算的なそれを取る多元主義においても同様で、「複数の善〔原子〕を単純に足し合

わせるだけなので全体論的多元主義よりも単純ですが、それでも複数の善をそれぞれどのように算定し、そして個々の善に幸福へのどれだけの寄与分を割り当てるべきかについて、明確な定式を与えることは困難」となる。

この点について、本稿で提示したピグーの福祉論はどのような含意を持ち得るであろうか。まず、基本的な戦略として、全体の価値を捕捉することにピグーはあまり関心を払っていない。全体の価値を表す関数があったとしたら、考えるべきことは、 Δ 差分（微分）なのである。つまり、様々なオプションがある中で、どれを選択したら最大の改善度がもたらされるか、が問われるのである。よって、現状の幸福の絶対量がどうこうではなく、何をしたら最も増進するかにピグーは重きを置いているのである。とはいえ、それで先の難点が解消されるわけでもない。当然、翻って、その差分（増進量）をどう測るかが問われることになる。

Yamazaki (2008) の分析によれば、ピグーの戦略は以下のように説明され得る。まず、多元的な複合体、およびその内のある構成要素 X を考える。次いで、その X に影響を及ぼすオプション A 、 B があったとする。そこで、 X に対する効果に関して A のほうが B よりも勝っているならば、複合体全体についても同様であると見なすのである。明らかに、一要素の増減を測ることのほうが多元的全体のそれを測ることよりも容易であろう。なおかつ、その一要素の計測ができるだけ客観的になされれば、よりいっそう好ましいことになる。ピグーによれば、それらに該当するものは何であるか。 X として「経済的厚生（満足、快楽）」、複合的全体として「一般的厚生」が当てはまると彼は考えた（先述したように、ピグーの厚生は元々多元的な要素から成る複合体で、満足としての経済的厚生はその一要素となっている）。ピグー曰く、

経済的厚生に対するある原因による影響を確認した際、この影響を、厚生全体に対する影響と比較してみて、たとえ大きさにおいて異なるにせよ、方向においては恐らく一致するものと看做して良いであろう。ただし、これはもちろん特別の反例が存さない場合に限られる。なおかつ、ある一つの原因の他の原因よりも経済的厚生に対してより有利な影響を与えることが分かった場合には、同一条件の下において、当該原因が厚生全体に及ぼす影響もより有利であると結論して良いであろう (Pigou 1952a, 20. 傍点引用者)。

ピグーは、この観念をエッジワース流の「証明されざる蓋然性」に準えている。この蓋然性に依拠すれば、任意の複数のオプションによる全体への効果の比較は、その一要素に対する効果の比較に還元される運びとなる。そもそも「…厚生とは頗る範囲の広い〔多元的な〕ものである。…これに影響を及ぼし得るあらゆる部類の原因を一般的に調査することは厖大複雑な仕事となって、全く実行不可能であろう。それ故に、我々の対象を限定する必要がある」(Pigou 1952a, 10-1)。全体の増減を代弁する要素の選定には当然慎重さが求められるが、実践における便宜としては理に適っているといえよう。

例えば、当初ピグーは、厚生（福祉）概念を、「経済的徳 economic virtue」と「人間的徳 human virtue」とに大別して、「恐らく、これら〔経済的徳〕のある程度の量までは善である。だが、それらの過剰は悪となる。ある閾までは、経済的徳の増加は人間的徳の改善をもたらす。それを超えると人間的悪徳を助長する」(Pigou 1907, 982) と説明する。ここに経済的厚生と厚生一般との区別の実態が見て取れる（山崎・高見 2018, 108）が、それは一先ず脇に置くとして、今着目すべきことは、福祉論として、経済的満足（≡快楽）と道徳的要素（人間的徳）とのハイブリッド型となっていることであろう。そして、経済的原因が厚生全体（人間的徳）に直接的に作用するのではなく、より直接的な部分要因変化を通じて、間接的に影響することから、ローカル（一部分）の改善⇒グロー

バル（複合体）の改善というピグー独自の視点がここでも再確認できる．もちろん，議論にはまだまだ粗が存するであろうが，多元体の計測の仕方に対する一つの回答を試みていると評価して差し支えないと思われる．

議論は前後するが，全体を代弁する代表要素に「経済的厚生」が挙げられているわけだが，この具体的な算定として，ピグーは，需要価格を想定している¹⁴⁾．ロジックとしては，以下のとおり．需要価格とは，ある個人がある財を購入したいと考える最大留保価格を指す．高い価格には，それだけ手に入れたいたいという欲求の強さが反映されることとなる．となれば，価格の高低と充足される欲求度合いとは概ね比例することになることから，より高い価格を支払えば，より強い欲求が満たされることとなり，それだけより幸福になるという理屈である．明らかに，貨幣尺度は明瞭であることから，欲求の強度および幸福量もしかりとなる．もちろん，幸福=カネなのか，という訝しさは付随するものの，実践的な算定の近似 approximation としては一応の目安となりそうである．

とりあえず，ここまでをまとめよう．（多元的複合物に関して）「複数の善をそれぞれどのように算定し，そして個々の善に幸福へのどれだけの寄与分を割り当てるべきか」については，まず，必ずしも個々の構成要素に幸福への寄与分を割り当てる必要はなく，全体（グローバル）を代弁する代表的要素（ローカル）をピックアップし，それをどれだけ増進するかを問うという簡便法もあり得る．次いで，同時に相対的に算定が容易な要素を抽出することで，善の計測の問題もある程度対応できると考えられる．

加えて，ピグーのハイブリッドな福祉論には今一つ重要なポイントが含まれている．先に多元説を考えるファクターとして，「複数の善の間のバランス・多様性・適切な関係」が指摘されていたが，本稿で提示したピグー福祉理念の「二元三層構造」の各ステージ，①ありのままの raw 選好，②客観的必要（ベーシック・ニーズ）充足，③陶冶された educated 選好は，各々複合体を組成する原子説でありながらも，相互の関係は，競合的 competitive というよりも辞書的 lexical であると解される．前者の関係性であれば，欲求充足と必要充足（その他客観説）とが競合した場合，どちらにどれだけのウェイトを付けるか（およびその帰結としての全体の価値計算）という問題が発生すると考えられるが，辞書的な関係性の場合，そうした競合やウェイト付けを考慮する必要はない．つまり，ピグーにあっては，①よりも②が，②よりも③が辞書的に優先されるということである．実際，彼は「ナショナル・ミニマム論」にて，①に相当する満足がどれほど得られようとも，②の客観的必要という規準からこちらが優先されるべきであると説いている¹⁵⁾．

…ナショナル・ミニマムとは正確に何を意味するものとすべきかについて明白な観念を得ることが望ましい．それは主観的な最低満足ではなくして，客観的な最低条件であると考えねばならない．その上，またその条件は生活の一部面だけに限られるものでなく，一般的な条件でなくてはならない．最低水準の中には，家屋の設備，医療，教育，食物，閑暇，労働遂行の場所における衛生と安全の装置等についてある一定の量と質とが含まれる．さらに，最低水準とは絶対的なものである（Pigou 1952a, 759. 傍点引用者）．

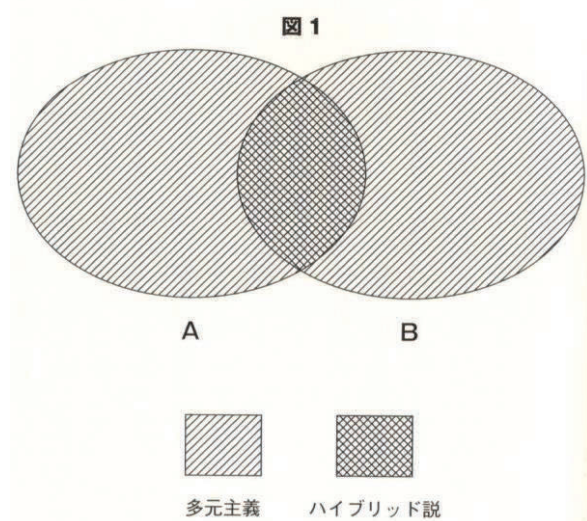
もし一市民があらゆる部門でそのミニマムに達するだけの身分になるならば，国家としては，その市民がある一部門を欠いたほうが良いとして選好（prefer）したとしても，それには全く関心を持たない．例えば，国家は，彼が人間らしい住居に適さない部屋に住むことを代価として，酒盛りのために貯蓄することを許さないのであろう．もっともこの政策には幾分の危険がある．貧しい人々が乏しい資源を種々の競合的必要の間にどのような方法で配分すべきかを強制的に決定することは，国家にとって極めて微妙な問題である．各人の気質と環境は非常に異

なっているのであるから、厳密な規則は不満足を生むに違いない。…この危険は認めなければならない。しかし、時代の公共心はそれに抗すべきことをも同様に要求する。人は一つの部門でミニマム以上に高まるために、他の部門でミニマム以下に落ちることを許されてはならない」（Pigou 1952a, 759-60. 傍点引用者）。

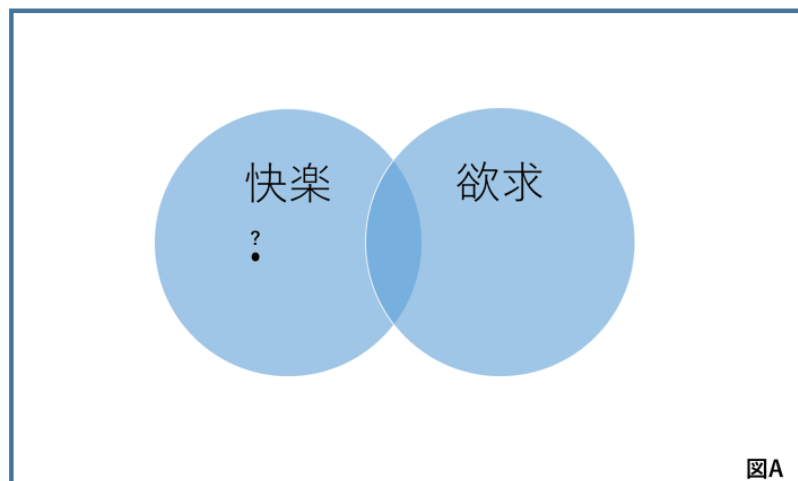
そして、②と③との関係でいうと、一定の教育、衛生、環境整備が施された上であれば、当人の主観的選好が最終的に尊重されることから、②<③という序列になるといえる（この場合も同様に、競合するそれぞれのアイテムの価値計算、比較考量というプロセスは踏まない）。

7. 補論

前節では、現代福祉論の観点からピグーの説を再検証した。特に、いわゆる「三国志」の派生であるハイブリッド・多元主義型については、まだ研究蓄積自体が十分とはいえないながらも、本稿では森村（2018）の解説から大きな裨益と啓発を受けた。そうした受益に深謝しつつも、若干さらに踏み込んで検討すべきことがあるようにも思えたことから、以下補論として、論考を展開しておきたいと思う。



出典：森村（2018，155）



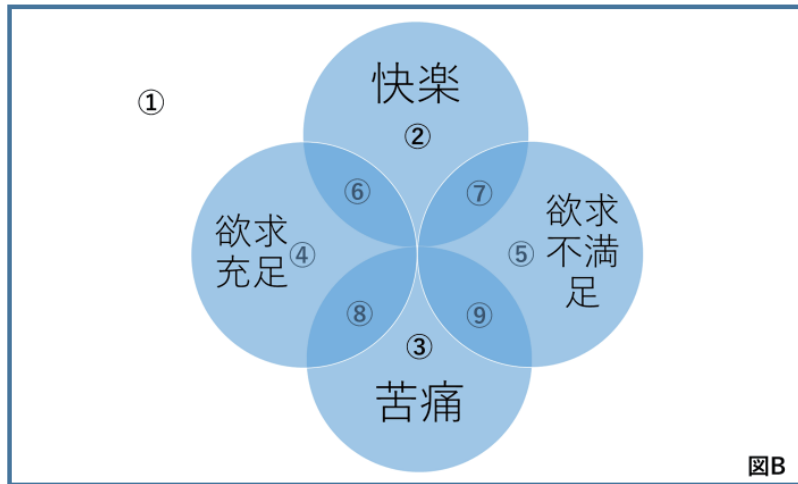


図 1 は森村（2018）のオリジナルである．それを参考に私が作成したのが図 A である．一見して明らかなように何れもヴェン図を意図して作成されていると考えられる（森村は明示的に述べてはいないが）．これらのヴェン図からいえることは、（例えば）快樂説について、快樂の集合とそれ以外（余事象）という二分法 *dichotomy* が前提されているということである（欲求説も同様）．そうになると、少なくとも次の二点を明らめなくてはならない．まず快樂集合の補集合は正確にはどんな事象を意味するのか、次いで、例えば、図 A における黒点（快樂集合と欲求充足の補集合との論理積）はどんな事象を指すのか、である．図 1 に係る森村の説明においては、まさにこうした快や欲求の余事象が何を示しているかが明瞭には語られていない．とはいえ、素直に考えれば、快集合の補集合は、「快が得られた」以外の全ての事象であり、少なくとも不快ないし苦痛が含まれていることになる（欲求充足の補集合は、「欲求が充足された」以外のあらゆる事象）．したがって、図 A の黒点は、快樂を得てはいるが、同時に欲求が充足されてはいない状態であることを示すことになる．

さて、ハイブリッド説は、快、欲求の積集合であることから、幸福とは快いと同時に欲求も満たされた状態ということになり、これはこれで理解はできる．しかしながら、他方の多元主義の説明の件では、快樂、欲求充足の何れか一方でも幸福の十分条件だとまで述べられているが、先の事象（黒点）はどう解釈、位置付けられるのかが少々問題となる．論理法則に従えば、連言（論理積）の何れか片方の命題だけを演繹すること（連言除去）は妥当なので、（ $\text{快樂} \wedge \text{欲求未充足}$ ）から、快樂を主張して良く、そうなると \Rightarrow 幸福（欲求未充足を抱えているにも拘わらず）という帰結となる．欲求未充足（欲求充足の補集合）が正確にはどんな厚生状態を指しているかが今一つ明瞭ではないことも手伝い、これを幸福と呼べるかどうか疑わしくはある（この点は後で再度触れよう）．

この釈然としない帰結の元凶は、二分法的前提に存すると考えられる．つまり、二分法のままだと、快樂の余事象は「快が得られた」以外の全事象ということに必然的になるものの、後者の集合はさらに分析が可能ではないかと思われるのである（欲求の場合も同様で、その補集合とは「欲求が充足された」以外の全事象といわれても、厚生評価が難しい）．快樂説を巡っては、快樂、苦痛、ニュートラルという三分 *trichotomy* から成る集合を考えた方がより適切ではないかと思われる．一般的な感覚からいっても、「心地良い」の否定は苦痛（のみ）というのはやや極端に過ぎるといえよう．取り立てて快樂も苦痛も感じない状態＝ニュートラルな状態もあり得るのではないだろうか．欲求充足についても、その余事象が欲求不満のみというよりも、無関心というニュートラルな事象を含めるべきだと思われる¹⁶⁾．

そのように、各説の事象を三分法に則って再構成したのが図 B である．快・不快、欲求充足・欲求不満のそれぞれのペアは互いに積集合を持つはずもないが、それら以外は、論理的に互いに積

集合を持ち得る。例えば、図中の②は、快くはあるが、欲求からすれば無関心である状態を、④は欲求が満たされた状態ではあるが、特に快・不快を感じてはいない状態を、⑥は、快かつ欲求も充足された状態を意味している。

さて、B 図（三分法）に基づいて、森村の説明を再構成してみよう。まず、ハイブリッド説（論理積型）が示すのは、⑥で間違いなかろう。問題は、多元主義（論理和型）のほうである。「多元主義によると、A〔快樂〕説も B〔欲求〕説もそれぞれ幸福の構成要素の十分条件を述べている…」（森村 2018, 155. 傍点引用者）ことからして、まずは、②、④、⑥が幸福に該当することは分かる。だが、⑦と⑧はどう位置付けたら良いだろうか。なかなか具体的な事態を想像することは容易ではないが、例えば、⑦は「このままではマズいと思いながらも抗えない快樂」、⑧は「あえて苦行の道を選ぶ」などが該当するかもしれない。厄介なのは、⑦も⑧もそれぞれ快ないし欲求充足が伴うことから、先に述べたように、論理法則により、それぞれ多元主義では幸福だと判断されることになってしまうことである。恐らく、森村が多元主義の件で正確に述べたかったことは、この図の②あるいは④何れか単独でも幸福（の十分条件）となる、ということであったと思われる。やはり、二分法を連想させるオリジナル図では、やや精緻さが欠けていたといわざるを得ないだろう。

また、同様に、不幸に関しても、B 図を用いればより明瞭な説明ができよう。まず、森村（2018, 160）によれば、ハイブリッド説における不幸は「＜欲求の非実現あるいは避けようとしていた事態の実現であって、苦痛を伴うもの＞だけ」（苦痛 ∧ 欲求不満）となることから、それは⑨に該当することになるだろう。これは不幸をあまりにも限定的に捉える嫌いがあるという。人は、避けようとしなかった事態でも苦痛が伴う、あるいは苦痛を覚えなくとも避けたい事態が生じる場合に不幸に陥ることがあるためだとされる。確かにそのとおりだとは思いますが、若干腑に落ちない点がある。まず、ハイブリッド説が定義する幸福が⑥であることは分かるとしても、同説の不幸が何故に⑨のみという話になるのだろうか。もちろん、⑥の否定（補集合）は⑨に限定されない。幸福が快と欲求との論理積であるからといって、不幸が苦痛と欲求不満との論理積でなくてはならないような必然性は存するのだろうか。あるいは、そもそも幸福を主張する説において、不幸をその裏返しとして導き、その不十分さを論うのは合理的なのであろうか。幸福に関する議論から必然的に不幸の議論が規定されるとはいいい切れないのではあるまいか。

他方、多元主義の不幸は集合（苦痛 ∨ 不満）＝③＋⑤＋⑨と（一瞥して）なりそうだが、幸福のケース同様、⑦と⑧の扱い方が問われる。「…ハイブリッド説の難点であった『不幸』の問題には、多元主義なら説得的な説明が与えられます。HD 多元主義の場合なら、苦痛だけでも、また欲求の非実現あるいは避けようとしていた事態の実現だけでも、本人に不幸をもたらすことになります」（森村 2018, 165）とある。不快または欲求不満何れかのみでも不幸の十分条件だとする多元主義はこれらをどう評価するのか。解釈如何によっては、⑦および⑧は（多元主義によると）幸福でもありかつ不幸でもあるという判断に至りかねない。やはり、こうした不整合を解消する意味でも、本論が提示する三分法を用いることが妥当であると解される。

※下編も、上編同様、JSPS 科研費 20K01577 の助成を受けたものである。

¹⁾ ただし、当該著において、三大説の明示的な議論が登場するのは、ほぼ末尾、しかも「補論」部分である。確かに学史的な先駆性からすれば、パーフィットの功績は認めてしかるべきだが、この分野を真正面から扱った本格的な研究の嚆矢としては、グリフィン（Griffin 1986）のそれではないかと思われる。

²⁾ 「幸せに生きるとは？ 人生を楽しむとは？ #早稲田メンタルクリニック #精神科医 #益田裕介 What does it mean to live happily?」

<https://www.youtube.com/watch?v=RwTUocDx33s&list=WL&index=2&t=67s> (accessed July 6th, 2022)

³⁾ こうしたことに関わり、私が見るところ、専門的、一般的幸福論において、基軸と思われる諸論点としては、①内在的 intrinsic か手段的 instrumental か、②主観的か客観的か、③一元論 monism

か多元論 pluralism か、④ what か how か、⑤ 競合的諸説の優劣を判定する基準、⑥ 諸価値の測定方法等を挙げることができよう。

④ 以下の説明は、グリフィン（Griffin 1986）、サムナー（Sumner 1996）、ブラッドリー（Bradley 2015）、森村（2018）らの論考を参考にしつつ、適宜筆者の知見を加えたものである。もっとも、三大説の概説については、各論者による多少の相違ないし $+ \alpha$ は見受けられるものの、ほぼ標準化されていると見て良い。ただし、本稿の眼目が（後続の）現代福祉論から見たピグーの福祉理念の再検討（主）であることから、三大説のサーベイは、何らかの新たな知見や考察を付すことが目的ではなく、予備考察（従）であることに注意されたい。

⑤ 古典的な代表でいうと、Bentham (1876) や Sidgwick (1907) らがいる。

⑥ 例えば、グリフィン（Griffin 1986, Ch.1）の解説にあるように、快樂説が state of mind であるのに対して、欲求説は state of the world と表現されることがある。

⑦ ミクロ経済学における「顕示選好」論などはこうしたアイデアに立脚している。予算制約の下、実行可能な消費バンドルが複数あるとして、その中から実際に選ばれたバンドルがその経済主体にとっては最も多くの効用を与えるものであった、と解するロジックである。ただし、そこでは効用の量や強度ではなく、単に順序（序数的効用）のみが想定されている。このように、福祉の欲求説は、近代経済学と非常に親和的であったと評される。

⑧ 欲求説を支持する陣営からの再カウンターとして、欲求の「理想化」（知悉的、道德的、自律的、…）が指摘される。つまり、ありのままの欲求の充足をそのまま幸福と捉えるのではなく、（例えば）偽情報に基づいていないか、適切な知見に基づいているか、外部から強いられたい選択ではないか、モラルに則ったものか等々、欲求に条件を付けようとする主旨である（森村 2018, 95）。とはいえ、こうした条件付き欲求説は、妥協の産物ではなかろうか。無制限欲求充足では、常識ないし多くの人々が意識的、無意識的に抱く幸福信念と相反することになるがゆえに、微調整（妥協）し、そうした観念と調和するように仕立てたに過ぎないと指摘することもできよう（その意味では、客観説の要素を密輸入しているとも）。ベンサムの「量が全て」という立場のほうが、むしろ徹底し一貫していて潔いようにも映る。

⑨ なるほど、センやエルスターの主張には説得力があるように思われるが、ここにも微妙な問題が伴う。確かに、抑圧された環境、奴隷制、専制政治体制において欲求を適応させることは不合理であろうが、これとて相対的なものではあるまいか（社会（外部）を変革するか、自己の選好（内部）を変えるか、あるいはその両方か、その線引きの基準は？）。個人をしてその選好を適応させざるを得ないような可能的状況全てがクリアされることはあり得ないであろう。やはり無理なことは無理、手に入らないものは手に入らない状況であれば、それらに執着し続けることよりも、欲求を適応させることで幸福になろうとすることが完全な間違いとはいいい切れない（森村 2018, 81）。

⑩ 森村（2018, 134）は、客観（リスト）説の検証の件で、リストの一つに「快樂」を挙げているが、これはいかなるものであるか。そもそも客観（リスト）説は、非快樂主義的・客観的アプローチであることから、主観的な満足や欲求は含まれないはず。ここでそうした要素をリストに含めると、ハイブリッドないし多元主義の議論との切り分けができないことになる。なお、森村は、幸福 \equiv 厚生（効用） \equiv 福祉というスタンスを取っているが、それだと非厚生主義 \equiv 非福祉主義となってしまう、センを代表論客とする福祉論における非厚生主義 non-welfarist の位置付けが難しくなってしまうと思われる。そこで、本稿では、快樂説と欲求説を厚生主義、（主に客観説を含めた）それ以外を非厚生主義と位置付ける。このほうが現代厚生経済学の論脈とも調和する。したがって、厳密には、厚生と福祉とを同次元のタームとしては扱わない。福祉 \equiv 広義の幸福とし、効用や必要、厚生はその下位概念であるとしよう。

⑪ \wedge , \vee という演算子から連想されるように、実際、森村はヴェン図（に相当するもの）を用いて説明している（本稿の補論参照）。

⑫ もっとも、固よりミル（Mill 1861, 237）はこの型の幸福観を想定していたと解される。事実彼は、あるものを欲することと快とはコインの表裏の関係にあり、同一事象の異なった呼び方であると唱えている。

⑬ 加えて森村は幸福とは逆の不幸の観点から、ハイブリッド論理積型を批評している。それによると、この型における不幸とは、「 $<$ 欲求の非実現あるいは避けようとされていた事態の実現であって、苦痛を伴うもの $>$ だけ」ということになるが、これは不幸をあまりにも限定的に捉える嫌いがあるという（2018, 160）。人は、避けようとしなかった事態でも苦痛が伴う、あるいは苦痛を覚えなくとも避けたい事態が生じる場合に不幸に陥ることがあるとされる。森村によれば、この場合の不幸は $\neg D \wedge \neg H$ と定義されるようだが、論理学の教科書的には、 $\neg D \vee \neg H$ （論理積の余事象）となるように思われる。もっともこれは論理的な誤りどころではなく、単に不幸をどう定義するか、という見解の問題といえるかもしれない。森村は、この型の不幸を上記のように（やや独自に）定義した上で、この不幸観は一般的な信念とはそぐわないことから、なおいっそうこの型の優位性に疑義を挟んでいる。とはいっても、森村本人がヴェン図（に相当するもの）を用いて説明していることから、自然と読み手にはド・モルガンの定理が連想されてしまう。少なくとも、この型の不幸がどうしてド・モルガンの定理に従わないのか、について説明が欲しかったところではある。なお、以上については、本稿の末節「補論」で再度検討することにしたい。

⑭ この辺りの詳細な議論については、塩野谷（1984）および山崎（2011, Ch. 3）を参照。

⑮ ちなみに、グリフィン曰く、「非常に魅力的な見解としては、例えば、『福祉』とはベーシック・

ニーズとありのままの選好とを共に含むとしつつも、後者に対する前者の優先権を認める、というものがある」(Griffin 1986, 41)。

¹⁶⁾ 欲求充足とは、欲した状態や世界が生じるということで字義どおりであるが、欲求不満足に関しては、ここではもう少し敷衍して、「欲した状態が起こらないことをも含み、望まない（避けたい）状態や世界が生じること」であるとしよう。そう考えれば、特に欲する訳でも、避けたい訳でもない、ニュートラルな状態（当人にとってはどうでもよい、無関心）という第三の事象が成立することになる。端的に言えば、あらゆる可能的事象の生起に対する、望む・望まない・無差別という三通りの意思である。ただ、このように快や欲求について三分法を取るからといって、幸・不幸もそうなるとは限らない。後者については、依然、二分法を取ることは論理的、理論的に可能であろう。何となれば、快楽＝幸福、不快＋ニュートラル＝不幸と規定可能だからである（あるいは、ニュートラル要素を幸福陣営に含めても可）。とはいえ、もちろん、幸福についても三分法を適用することは可能である。

【参考文献】

- 1) 上宮智之 2007. 「F.Y.エッジワース『数理精神科学』と功利主義」『経済学史研究』49 (1), 69-84.
- 2) 塩野谷祐一 1984. 『価値理念の構造』東洋経済新報社.
- 3) 森村進 2018. 『幸福とは何か』筑摩書房.
- 4) 山崎聡 2011. 『ピグーの倫理思想と厚生経済学』昭和堂.
- 5) ———2014. 「創設期の厚生経済学の一側面——ピグーと優生思想」『経済研究』65 (2), 126-139.
- 6) ———・高見典和 2018. 「ケンブリッジの厚生経済学」西沢保・平井俊顕編『ケンブリッジ 知の探訪』ミネルヴァ書房.
- 7) ———2021. 「ピグーの平等論」新村聡・田上孝一編『平等の哲学入門』社会評論社.
- 8) Anderson, E. 1993. *Value in Ethics and Economics*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 9) Bentham, J. 1876. *An Introduction to the Principles of Morals and Legislation*, Oxford: Clarendon Press.
- 10) Bradley, B. 2015. *Well-Being*. Polity Press.
- 11) Elster, J. 1982. Utilitarianism and the Genesis of Wants, in Sen, A.K. and Williams, B. eds. *Utilitarianism and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 12) ———1983. *Sour Grapes: Studies in the Subversion of Rationality*. Cambridge, Paris: Cambridge University Press.
- 13) Freeden, M. 2015. *Liberalism: a very short introduction*, Oxford: Oxford University Press (山岡龍一監訳 寺尾範野・森達也訳『リベラリズムとは何か』筑摩書房, 2021年).
- 14) Gaertner, W and P.K. Pattanik. 1988. An Interview with Amartya Sen, *Social Choice and Welfare*, 5, 69-79.
- 15) Griffin, J. 1986. *Well-Being*, Oxford: Clarendon Press.
- 16) Mill, J.S. 1843. *A System of Logic, The Collected Works of John Stuart Mill (CW)*, vols. VII, VIII. Toronto: University of Toronto Press (大関将一監訳『論理学体系』全VI冊春秋社, 1949-59年).
- 17) ———1861. *On Liberty. In Essays on Politics and Society, CW*, vols. VIII, IX, X. Toronto: University of Toronto Press (早坂忠訳「自由論」『世界の名著』38 中央公論社, 1967年).
- 18) ———1863. *Utilitarianism, CW*, vol. X (水田玉枝・永井義雄訳『功利主義』世界の大思想Ⅱ - 6 河出書房, 1967年).
- 19) Myrdal, G. 1969. *The Political Element in the Development of Economic Theory* [translated from the German by Paul Streeten], New York: Simon and Schuster.
- 20) Nozick, R. 1974. *Anarchy, State, and Utopia*, New York: Basic Books.

- 21) Parfit, D. 1984. *Reasons and Persons*, Oxford: Oxford University Press（森村進訳『理由と人格』勁草書房, 1998年）.
- 22) Peart, S. and D. Levy, 2003 Denying Human Homogeneity: Eugenics & the Making of Post-Classical Economics, *Journal of the History of Economic Thought*, 25 (3), 261-88.
- 23) Pigou, A.C. 1905 *Principles and Methods of Industrial Peace*, London: Macmillan.
- 24) ———1906. The Unity of Political and Economic Science, *Economic Journal*, 16 (63), 372-80.
- 25) ———1907. Memorandum on Some Economic Aspects and Effects of Poor Law Relief, in *Appendix* vol.9. 1910: 981-1000, Minutes of Evidence, Royal Commission on the Poor Laws and Relief of Distress, Cd.5068. London: His Majesty of Stationary Office and Wyman and Sons. Ltd.
- 26) ———1908a *The Problem of Theism, and Other Essays*, London: Macmillan.
- 27) ———1908b *Economic Science in Relation to Practice*, London: Macmillan.
- 28) ———1912. *Wealth and Welfare*, London: Macmillan（八木紀一郎監訳／本郷亮訳『ピグー 富と厚生』名古屋大学出版会, 2012年）.
- 29) ———1922. The Private Use of Money, *The Contemporary Review*, 121, 452-60.
- 30) ———1946. *Income. An Introduction to Economics*, London: Macmillan（塩野谷九十九訳『所得：経済学入門』東洋経済新報社, 1952年）.
- 31) ———1947. *A Study in Public Finance*, 3rd ed. London: Macmillan（本郷亮訳『ピグー 財政学』名古屋大学出版会, 2019年）.
- 32) ———1951. Some Aspects of Welfare Economics, *American Economic Review* 41:287-302.
- 33) ———1952a. *Economics of Welfare*, 4th ed. London: Macmillan（気賀健三【他】訳『ピグウ厚生経済学』全IV冊 東洋経済新報社, 1953-55年）.
- 34) ———1952b. *Essays in Economics*, 2nd ed. London: Macmillan.
- 35) ———1955. *Income Revisited: Being a Sequel to Income*, London: Macmillan.
- 36) Robinson, A. 1968. Pigou, In *International Encyclopedia of Social Sciences* 12. London: Macmillan.
- 37) Sidgwick, H. 1907. *The Methods of Ethics*, 7th ed. London: Macmillan.
- 38) Sumner, L.W. 1996. *Welfare, Happiness, and Ethics*, Oxford: Clarendon Press.
- 39) ———2006. Utility and Capability, *Utilitas*. 18 (1), 1-19.
- 40) Suzumura, K. 1999. Welfare Economics and the Welfare State, *Review of Population and Social Policy*, 8, 119-38.
- 41) Yamazaki, S. 2008. Pigou's Ethics and Welfare, *Lecture Note* (Young Scholars' Seminar, Japan Society of Economic Thought) 1, 57-75.
- 42) ———2021. Pigou's Welfare Economics Revisited: A Non-welfarist and Non-utilitarian Interpretation, in Backhouse, Roger E., Baujard, Antoinette, Nishizawa, Tamotsu eds. *Welfare Theory, Public Action, and Ethical Values: Revisiting the History of Welfare Economics*, Cambridge: Cambridge University Press.

令和4年（2022）10月28日受理

令和4年（2022）12月31日発行

